

新しい中学生用いじめスクリーニング尺度開発

—— 予備調査による妥当性検証 ——

柳田美智子*・金丸隆太**

(2015年9月15日受理)

New Screening Questionnaire Development for Bullying in Junior High School: Pilot Study of Validity

Michiko YANAGITA and Ryuta KANEMARU

キーワード:いじめ, 中学生, スクリーニング

いじめの早期発見・早期対応のためにより精度の高いいじめチェックリストを作成することを目的とし、本研究では予備調査として中学生用いじめスクリーニング尺度(生活アンケート)を作成・実施した。生徒がより正直に回答しやすいように、いじめに関連しない意識や行動、またいじめと関連するかもしれない生活に関する質問項目を取り入れ、最終的に55項目と自由記述のアンケートを作成した。また得られた結果に対して、より妥当性のある質問項目を選定するための分析を行い、更に9名にインタビュー調査を行った結果、質問項目の妥当性が検証された。探索的因子分析による因子の精査においては「LINE因子」「被害因子」「加害因子」「傍観因子」の4因子構造がみられた。LINEの項目で1因子を構成したことから、学校の中でのいじめとLINEによるいじめは別の現象であることも示唆された。学校現場でのいじめの実態を把握するために、LINE因子の項目を除いた被害、加害、傍観の各高群を抽出し特徴を調べた結果、被害高群のうち67%が傍観高群でもあり、52%が加害高群でもあった。一方、被害役割のみになっている生徒は、被害高群のうち19%だった。被害生徒の一部で役割が固定していることに加えて、いじめに関する役割が重複していることが明らかになった。

はじめに

文部科学省は平成18年度の調査から、いじめを「当該児童生徒が、一定の人間関係のある者から、心理的、物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの。」と新しく定義した。個々の行為が「いじめ」に当たるか否かの判断は、表面的・形式的に行うことなく、いじめられた児童生徒の立場に立って行い、起こった場所は学校の内外を問わないとしている。これは端的にいうと、行為を受けた側が苦痛を感じるものは全ていじめ被害とみなす、と広い視点に立ったもので

*茨城大学大学院教育学研究科学校臨床心理専攻

**茨城大学大学院教育学研究科

ある。また文部科学省は、いじめの早期発見についての基本的考え方として、いじめは大人が気づきにくく判断しにくい形で、遊びやふざけあいの延長にあるものだと認識し、ささいな兆候であっても疑いを持ち、軽視することのないように呼びかけている。そして、定期的なアンケート調査や教育相談を実施して、実態把握に取り組むことを推進している。国立教育政策研究所の生徒指導リーフ「いじめアンケート Leaf. 4」では、多くの教員がいじめの問題に対して楽観的であることや、いじめを「発見できている」かのように思い違いをしないようにと指摘している。

いじめの早期発見のために、国、都道府県、市町村、あるいは各学校単位で、様々な取り組みがなされている。実態調査の質問紙も多種多様である。そんな中、いじめに関する調査用紙にはストレートな質問項目が多くみられ、児童生徒が正直に回答しづらくなかなか実態を把握することが難しいということも指摘されている。全国の質問紙の中には、神奈川県教育局の「すれ違うときに大げさに人によけられる」、静岡県教委の「発言すると、おかしくないのに笑う」、鳥取県教委の「パソコンや携帯電話で嫌なことをされた」など機微に通じる質問項目もある。だが、質問項目がいじめに関するものばかりであると、生徒はアンケートの目的に気が付いて正直に回答しなくなるという可能性が否定できない。一方で、いじめ以外の領域を設けた質問紙「i-check」(梶田・住本, 2015)や、学校適応感を測定することでいじめの実態把握や対応策を考えることのできる「アセス」(栗原・井上, 2010)なども開発・販売されている。また、福岡県教育委員会は「自己概念」「学習意欲」など6領域と自由記述からなる「学校生活アンケート」を作成し、いじめの早期発見・早期対応を呼びかけている。これらのように「いじめ」のみにスポットライトを当てない質問紙を作成することはいじめの早期発見に効果的である。いじめのスクリーニングのためのアンケート作成にゴールは無く、常に時代背景や学校文化に合わせ、新しいものを作成し、学校にとってアンケートの選択肢が多くあることが望ましいであろう。

目的

時代背景を取り入れまた少しでも生徒が事実を回答しやすいように配慮した中学生用いじめスクリーニング尺度を作成するための予備調査を行うことを目的とした。尺度にはいじめに関連しない生徒の意識や行動について、また、いじめとの関連がありうるかもしれない生活についての質問項目を取り入れ、生徒がより正直に答えやすい、かつ簡便な新しいいじめアンケート(いじめチェックリスト)を作成することを目指した。得られた結果に対して、より妥当性のある質問項目を選定するための分析をおこなった。

方法

尺度：全国各地のいじめアンケート、内閣府「低年齢少年の生活と意識に関する調査報告書」等を参考に、いじめスクリーニング尺度である「生活アンケート」を自作した。項目作成にあたっては、いじめの加害、被害、傍観について、自身の意識と行動をチェックできるようにした。項目は現場の中学校教員とディスカッションしながら、生徒本人がいじめと思っていないような内容や、LINEに関する項目も多く取り入れた。また回答しやすいように、いじめに関連しない生活に関する

質問項目も取り入れた。最終的に55項目（全て5件法）と自由記述欄になった。仮定した因子とそれぞれの項目数は、「被害」19項目、「加害」7項目、「傍観」5項目、「生活一般」24項目（「生活」5項目、「援助資源」9項目、「意識」10項目）とした。さらに自由記述欄を設けた。

調査対象および調査方法：学校長から調査の同意を得たX県内の公立中学校1・2年生の計283名（1年男子71名、女子76名、2年男子58名、女子75名、不明3名）から回答を得た。フェイス項目として学年、性別、クラス、出席番号、面接希望の有無の回答欄を設けたが、クラスと出席番号については任意記入（「書きたくない人は書かなくてかまいません」）とした。

インタビュー調査：上記調査回答者の中で、インタビュー調査可能と回答した生徒36名のうち、後述する被害、加害、傍観高群に当てはまっており、かつ実際にインタビュー可能だった9名に、回答の妥当性を検証するためのインタビュー調査を行った。

倫理的配慮：質問紙の実施の前に、回答は自由意志に基づくこと、回答しないことによって不利益は生じないこと、回答した内容には守秘性が保たれることを保証した説明文を回答者全員に配布した。また、説明文、質問紙兼回答用紙の他、長形3号の封筒を全員に配布した。研究者以外が回答を見ることの無いように、各回答者が回答後の用紙を折りたたんで封筒に入れてから、各教室で担当教員により回収された。学年末で3年生は受験シーズンであったため、1,2年生のみを対象に実施した。

調査時期：2015年2～3月。

結果と考察

1) 各因子と学年・性別の特徴

被害、加害、傍観の得点を従属変数、学年と性別を独立変数とした2要因の分散分析をおこなった。その結果、被害、加害、傍観の全てにおいて、学年や性別の主効果は見られず、また交互作用もなかった。いじめについては、特定の学年や性別に偏って起きている事態ではないと推察できる。なお傍観については性別の有意差はなかったものの、女子が男子より得点が高い傾向があった。今後、対象者を増やして分析を行うことでこの傾向を更に分析できるだろう。

2) 探索的因子分析による因子の精査

いじめ行動に関連する項目の因子は仮説により被害、加害、傍観の3因子に分けられていたが、実際に生徒が回答した際にどのような項目のまとまりが見られたかを分析するために、探索的因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った。最終的に結果の解釈妥当性を考え、「LINE因子」「被害因子」「加害因子」「傍観因子」の4因子構造を採用した（表1）。仮説ではLINEに関する4項目は、加害、被害、傍観にそれぞれ分けられていたが、LINEの4項目で1因子を構成した。このことから、学校の中でのいじめとLINEによるいじめは別の現象であることも示唆される。今回対象者とした中学生のLINE利用率は、教員の話から約70%前後と推測されているが、おそらくLINEを利用している生徒はそれにまつわる加害と被害の両方を経験しやすい、ということが表れたと考えられる。また、傍観因子に仮定していた「39. 最近、同級生が人に嫌なことをしているのを見かける」という項目は、被害因子にまとまった。

表 1. 探索的因子分析の結果

項目	因子負荷量			
	I	II	III	IV
I LINE 因子 ($\alpha=.870$)				
47 LINE などで友達にメンバーから外されたことがある。	.849	.294	.228	.110
49 LINE などで友達にメンバーから外されている。	.818	.263	.294	.190
48 LINE などで友達がメンバーから外されたことを知っている。	.784	.141	.201	.253
46 LINE などで友達をメンバーから外したことがある。	.755	.157	.334	.274
II 被害因子 ($\alpha=.659$)				
22 友達から、今、嫌なことをされていると感じる。	.141	.696	.110	.256
36 友達に仲間はずれにされている。	.152	.682	.253	.495
43 掃除や給食の仕事を押し付けられることが多い。	.183	.550	.119	.088
39 最近、同級生が人に嫌なことをしているのを見かける。	.252	.486	.207	.446
III 加害因子 ($\alpha=.710$)				
51 つい友達を傷つけてしまう。	.266	.237	.820	.316
52 つい友達をいじってしまう。	.204	.030	.657	.348
32 やり返すことは悪くないので、友達にたくさんやり返している。	.191	.177	.582	.106
IV 傍観因子 ($\alpha=.571$)				
35 友達が仲間はずれにされていることを知っている。	.226	.332	.305	.853
因子寄与率 (%)	28.0	12.3	9.1	5.0
累積因子寄与率 (%)				54.5

3) 被害・加害・傍観高群の特徴

全体の質問項目に対して、LINEに関する項目だけにまとまりがみられたことから、ここではLINEではなく学校現場でのいじめの実態を把握するために、LINEに関する項目を除いた被害、加害、傍観の各項目について高群を抽出した。抽出の仕方は、現場の教員とのディスカッションにより、典型的ないじめ被害、加害、傍観と言える項目として、それぞれ被害3項目・加害3項目・傍観2項目を選び、その項目数×粗点の中間点を基準にした。それぞれの特徴を調べた結果、被害高群のうち67%が傍観高群でもあり、また、52%が加害高群でもあった。被害高群のうち加害や傍観が低群であった者、つまり、完全に被害役割のみになっている生徒は、被害高群のうち19%だった(図1)。

これにより、被害の当事者はいじめを見ている確率も上がる可能性があること、被害を受ける生徒の一部は被害役割が固定している可能性があることが考えられる。更に、被害・加害・傍観のすべてにおいて高群だった者は、被害高群のうち43%だった。この重複の仕方を検討すると、いじめの被害、加害、傍観は、多くの場合役割が完全に固定するものではなく、同時に経験されている生徒もいるという実態も見えてきた。

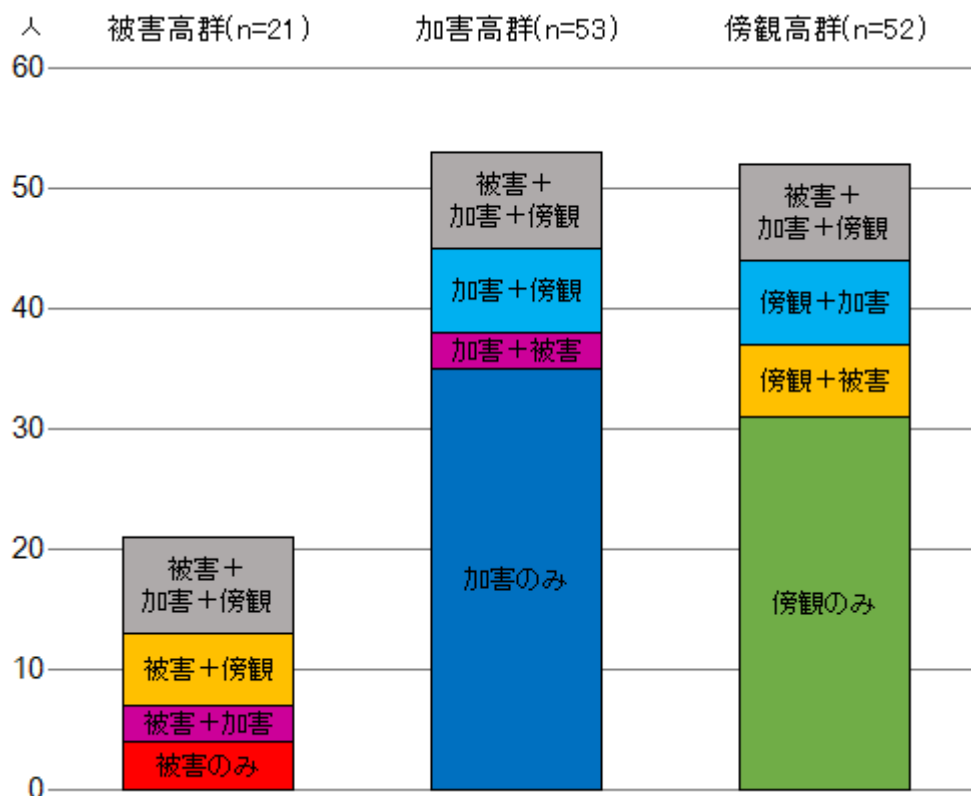


図1. 各因子の高群の生徒人数

4) IT 相関による項目の精査

全質問項目のうち被害因子、加害因子、傍観因子の平均点との相関係数が.70 以上だった項目は 10 項目で、それぞれの因子に仮定したトップダウン項目とすべて一致した。さらに、相関係数.40 以上のものを含めると全部で 17 項目になった。この中で、各因子に仮定していなかった質問項目 2 つが抽出された。1 つは、被害因子と.42 で相関があった「53. 自分を理解してくれる人は周りにいない」、もう 1 つは、加害因子と.63 で相関があった「50. 理由もなく人を傷つけたくなることがある」であった。前者は援助資源因子に、後者は意識因子に仮定されていたものであるが、それぞれ被害因子と加害因子との間に中程度以上の相関がみられたことは興味深い。

5) 自由記述の分析

質問項目の終わりに設けた自由記述欄に記入があったのは、283 名中 34 名で、約 12% だった。内訳は、1 年生 24 名 (男子 10 名, 女子 14 名), 2 年生 10 名 (男子 3 名, 女子 7 名) だった。なおこのうち、各群高群にあたる生徒は計 22 名だった。記載された内容は主に 5 つに分類することができた。一つ目はアンケートに対して肯定的なもので、「自分の回答が役立ってほしい」「スッキリした」「定期的にやった方がいい」「自分を見つめ直せた」などがあった。「見つめ直せた」という記述は肯定的な記述計 18 件のうち 5 件に及んだため、二つ目の分類とする。三つ目は、「特になし」「やる意味あるの?」など否定的なもので、計 10 件あった。四つ目は「どうすればいいですか?」など訴えるもので計 3 件あり、中には直接的にいじめ被害を訴えるものが 1 件あった。そして五つ目はア

アンケートに関する質問などでその他とし、これは計3件だった。各高群に該当した者の記述内容と件数は表2の通りである。

表2 各高群の自由記述の内容と件数

	肯定的	見つめ直し	否定的	訴え	その他
被害高群 (被害のみ)				1	
被害高群 (+傍観)	2	1			
被害高群 (+加害)					
被害高群 (+加害, 傍観)	3		1		
加害高群 (加害のみ)	2	1	2	1	1
加害高群 (+傍観)			2		
傍観高群 (傍観のみ)	2	2			1

加害高群 (加害のみ) の生徒にすべての分類で記述があったことから、加害生徒からの声が多く出ていることに注目したい。否定的な記述はすべて加害高群に属する生徒からのものだった。また、傍観高群にあたる生徒は、加害高群と重なる生徒以外は、肯定的・見つめ直しの記述が多かった。これらのことからアンケート実施に対して、加害高群の生徒は歓迎せず、傍観高群の生徒は歓迎したという状況が見えてくるといえるだろう。また、加害のみ高群の生徒の中に、肯定的・見つめ直し・訴えの記述があったことから、アンケートをきっかけとして意識や行動が変化する可能性があることも示唆される。

6) インタビューの分析

被害高群 (被害のみ) Aさん

「22. 友達から、今、嫌なことをされていると感じる」に対する【あてはまる】の回答について『冷やかし、悪口、いやみがある。存在が邪魔などと言われる』、「23. 友達からされる嫌なことは、長い間続いている」に対する【あてはまる】の回答について『仲間外れは小学校の時から』という発言があった。これにより、被害の有無と程度が確認され、質問紙の結果と一致したことがわかった。

被害高群 (被害のみ) Bさん

「20. 友達から以前、嫌なことをされた」に対する【あてはまる】の回答、および、「24. 以前、友達からされた嫌なことを忘れられない」に対する【あてはまる】の回答について、共にそうであることが確認された。これにより、現在の被害ではなく過去の被害の影響が大きいことがわかった。

被害高群+傍観高群 Cさん

「22. 友達から、今、嫌なことをされていると感じる」に対する【とてもあてはまる】の回答、および「23. 友達からされる嫌なことは、長い間続いている」に対する【とてもあてはまる】の回答について、『先生に相談している』という発言があった。これにより、被害の有無と程度が確認された。

被害高群＋傍観高群 Dさん

「22. 友達から、今、嫌なことをされていると感じる」に対する【あてはまる】の回答について『友達が嫌なことをされていることが嫌だ』、また、「39. 最近、同級生が嫌なことをしているのを見かける」に対する【どちらでもない】の回答について、『友達が嫌なことをされているのを見たとき、何も言えなかった』という発言があった。これにより、被害よりも傍観の程度が高いことがわかった。

被害高群＋傍観高群 Eさん

「36. 友達に仲間外れにされている」に対する【とてもあてはまる】の回答について、『部活で仲間外れにされている』と発言があった。これにより、傍観よりも被害の程度が大きいことがわかった。

加害高群（加害のみ） Fさん

「52. つい友達をいじってしまう」に対する【とてもあてはまる】の回答についてそうであることが確認された。また、「32. やり返すことは悪くないので、友達にたくさんやり返している」に対する【とてもあてはまる】の回答について、『嫌なことをした人は嫌いな人、になるので』と発言があった。なお、「20 友達から以前、嫌なことをされた」と「31 嫌なことをした人は、同じように嫌な経験をした方がいいと思う」に対して双方とも【とてもあてはまる】の回答だったことについて、そうであることがわかった。これらの結果を受けて、加害行為が確認されるとともに、過去のいじめ被害も確認されたといえる。

加害高群＋傍観高群 Gさん

「39. 最近、同級生が嫌なことをしているのを見かける」に対する【どちらでもない】の回答について『昔あったな、という感じ』、「51. つい友達を傷つけてしまう」に対する【とてもあてはまる】の回答について『自分では軽く言っているつもりが、友達は傷ついているかも』、「32. やり返すことは悪くないので、友達にたくさんやり返している」に対する【とてもあてはまる】の回答について『イラッとしたらやり返す』という発言があった。やり返すことについてその理由を尋ねると、『わかんない・・・家庭事情かな』と答えた。これらより、加害の有無と程度が確認されると同時に、加害の背景にあるものの一端が見えた。

傍観高群＋被害高群 Hさん

「39. 最近、同級生が嫌なことをしているのを見かける」に対する【どちらでもない】の回答について『あるんだろうな、と思う』との発言があった。また、「20. 友達から以前、嫌なことをされた」に対する【とてもあてはまる】の回答がそうであることが確認された後、「43. 掃除や給食の仕事を押し付けられることが多い」の回答が未記入であることについて尋ねたところ、『・・・(つけ) 忘れてはいないと思う』と述べ、43の質問は答えづらかったということを示唆した。これらより、傍観の程度と、現在の被害の可能性が確認されたといえる。

傍観高群（傍観のみ） Iさん

「35. 友達が仲間外れにされていることを知っている」に対する【どちらでもない】の回答について『一時期、仲間外れにあっている人を知っていた。今もあると思う』という発言があった。また、「22. 友達から、今、嫌なことをされていると感じる」に対する回答が【全くあてはまらない】だったことについてそうであることが確認できたが、「47. LINEなどで友達にメンバーから外されたことがある」に対する【あてはまる】、「49. LINEなどで友達にメンバーから外されている」に対す

る【どちらでもない】という回答については、『LINE で外されたときは、嫌だな～と思った』、『LINE では、誰かが外して、(その後) 外されちゃう。学校のいじめとは別の世界』という発言があった。このインタビューにより、傍観の実態がわかると共に、LINE 因子の裏付けがされた。

ある高群とある高群に重なりがある生徒の場合、どちらの群がより実態に近いのかがインタビューによって明らかになった点があるが、全体として、項目に関する回答と、各高群へのあてはまりに齟齬はみられなかった。このことから、質問項目とその回答と、実態の間には大きな乖離はなく、質問項目の妥当性が検証されたといえる。その他、加害の背景にあるもの(過去のいじめ被害や家庭環境)、また、LINE 因子の裏付けが示唆される発言があったことには意義があるといえるだろう。

その他、注目したいのは、インタビューに答えた9名全員が、「5. 体調が悪いと感じることがある」の質問に対して、【とてもあてはまる】か【あてはまる】と回答していたことである。この質問項目の平均値は [1: 全くあてはまらない～5: とてもあてはまる] という range に対して 3.12 (SD=1.32) だったので、インタビューに協力してくれた生徒は皆平均よりも健康面に不安があったと考えてよいであろう。また、加害高群の生徒2名は双方とも「9. 家の人に困ったことを話せる」「26. 自分はいつでも家族に頼れると思う」に対して【全くあてはまらない】と回答しており、インタビューでもそのことが確認された。これらの質問項目の平均値は、項目9が2.62 (SD=1.33)、項目26が2.47 (SD=1.17) だった。

総合考察

本研究では、生徒が正直に答えやすいいじめスクリーニング質問紙を作成することを目的とし、パイロットスタディとして「生活アンケート」を実施した。質問紙の結果を統計的に分析して質問項目の精査をおこなうことに加え、インタビューによっても質問項目の妥当性を検証した。

質問項目の吟味について、まず、LINE に関する被害、加害、傍観の質問が、学校場面での質問とは別のまとまりとなったことについて考えたい。これはインタビューにおいて『学校のいじめとは別の世界』という生徒の声があったことから、学校生活でのいじめとインターネットでのいじめは同質のものではないということを示す。つまり、学校生活上いじめ被害とは全く無関係な問題のない生徒であっても、ネット上では辛いいじめ被害を受けているというケースが想定される。ネット上のいじめが生徒の心身に大きな負担を及ぼすことは想像に難しくなく、このケアについても考えなければならないが、学校生活を送る上でのいじめ被害と、ネット上のいじめ被害は、別次元で検討する必要があることが示唆されたといえるであろう。いずれにしても、現実とネットの双方において生徒が心身の負担を負っている可能性があるということを留意しなければならない。

次に、今回、被害、加害、傍観と因子を仮定して質問項目を作成したところ、傍観因子に仮定した項目が被害因子と同じまとまりになったことについて考える。これは、いじめの四層構造(森田・清水, 1999) に着目したことで役割の分割を仮定したことに対し、役割には重複性があることを示した。これまでの多くのいじめ研究において、役割重複に言及したものは筆者の調べた限り見当たらず、この視点を持っていじめ対応にあたることに意義が見出せるのではないだろうか。それにより、役割が単独で固定している生徒(特に被害)の深刻度を推測することにも役立つのではないかと考える。

また本論文では詳細を報告しなかったが、項目の精査の中で、被害、加害、傍観の各因子に仮定していなかったにもかかわらず相関を示した項目が2つ抽出されたことに注目したい。援助資源因子に仮定していた「53. 自分を理解してくれる人は周りにいない」が被害因子と、意識因子に仮定していた「50. 理由もなく人を傷つけたことがある」が加害因子と中程度の相関があった。この結果は自由記述やインタビューの結果に通じるものでもあるといえ、いじめに関わる生徒を理解する上で重要な示唆を与えるものと考え。インタビューの結果、質問項目の妥当性が検証されたが、自由記述欄の結果を合わせて回答者である生徒の状態を理解しようとするとき、特に加害生徒の声の広がりが目立ったといえる。自記式の質問紙調査には、調査対象者の防衛が働きやすく虚偽の回答をしたり回答を拒否することがある、というデメリットがあることを考慮すると、加害高群に属する生徒の数は調査結果よりも多いと想像できる。このことを踏まえると、声を上げた加害高群は、かなりの少数派となるだろう。その少数派の声の広がり注目することは、いじめの早期発見・早期対応において重要なことだと考える。それは、生徒のSOSの声を適切に拾うことにもつながるであろう。また、被害高群の生徒に対しては、理解者の存在を彼らに伝えることの重要性を、改めて考える必要がある、ということ調査結果は示したのではないかと考える。

今後の課題

本研究では、いじめの有無のスクリーニングに関する質問項目の妥当性が検証された。今後更に、質問紙の信頼性と妥当性の検証を続け、尺度を完成させた上で大規模な調査を行うことが最大の課題である。そして同時に重要な課題は、いじめ発見後に彼らを適切に理解して援助することである。そのため今後、より有効ないじめ対応のために、更に項目を精査してスクリーニングに関する項目だけでなく、効果的に援助因子の項目を混在させた簡便なアンケートとして尺度を完成させることを目指したい。

本研究の目的はいじめの早期発見までにとどまっているが、真にいじめの問題を解決するためには、あまりにも多くの課題がある。森田・清水（1999）が言うように、いじめ問題は私たち大人社会の反映であり、「対症療法」であれ「予防教育」であれ、原因や背景の認識が不適切な場合は、いじめの事態をいっそう悪化させる。いじめが発生しているかどうかという観点だけではなく、いじめの原因や背景を適切に把握できる総合的な質問紙は、今後更に必要とされるであろう。また、小玉（2011）は、アンケート調査は事件を発見するためではなく、教師の観察と感性を裏付けるためのものとして補助的に使用されるのが望ましいと述べている。

本研究の結果を通して、被害であれ加害であれ傍観であれ、いじめに関わる生徒には「信頼できる大人に理解してもらおう」という体験が必要であることを感じた。生徒をいじめから守るためには、アンケートの内容以前にアンケートを実施する大人が子供から信頼されることが大切であろう。そして、いじめに対応する際は、学校現場だけでなく家族をはじめとした生徒を援助する大人の社会全体として広く視点を持つことが肝要だと考える。このような観点に立って今後も、いじめ対応に役立つ更に精度の高い簡便なアンケートを作成していきたい。

引用文献

- 福岡県教育委員会. 2007. http://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/19041_33612_misc.pdf
- 神奈川県教育局. 2013. <http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f470374/p678813.html>
- 梶田叡一・住本克彦. 2015. 『子どもたちが輝くクラスづくりのための総合質問紙調査 i-check』
(東京書籍)
- 国立教育政策研究所. 2015. <http://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf04.pdf>
- 小玉有子. 2007. 「「いじめ」という言葉を使わなくても子どもは見える—いじめアンケートを実施するときの工夫と配慮—」『月刊学校教育相談』 1月号, 12-15.
- 小玉有子. 2011. 「言葉にできない気持ちをくみ取るアンケート項目の工夫」『月刊学校教育相談』
12月号, 4-7.
- 栗原慎二・井上弥. 2010. 『アセス (学級全体と児童生徒個人のアセスメントソフト) の使い方・
活かし方』(ほんの森出版)
- 文部科学省 <http://www.mext.go.jp/ijime/detail/1336269.htm>
- 森田洋司・清永賢二. 1999. 『いじめ—教室の病』(金子書房)
- 内閣府. 2007. 『低年齢少年の生活と意識に関する調査報告書』
- 静岡県教育委員会. 2013.
<http://www.pref.shizuoka.jp/kyouiku/kk-060/documents/ijimemanyuaru.pdf>
- 鳥取県教育委員会. 2014. <http://www.pref.tottori.lg.jp/245409.htm>